

## 新刊紹介

### 岩清水由美子著 『コンラッドの小説におけるジェンダー表象 —ミソジニストをこえて—』

南雲堂, 2021. 254 頁

井上 真理

本書は、ジェンダー表象の観点から、コンラッドの再評価をはかる日本で初の研究書である。「はじめに」によると、コンラッドについての、男らしい世界を好む、女嫌いの作家というステレオタイプは1950年代から1960年代に確立され、1970年代1980年代は修正されることなく、1990年代に入ってようやく修正され始めたという。著者はちょうどその転換期となった1990年代にこのプロジェクトを開始し、2000年代以降は海外に向けても論文を発表してきた。今回、これまで内外の機関誌などに掲載された論文を単行本化するにあたり、文章を全て日本語に直し、内容を体系化するために大幅な書き直しも行ったという。本書を通読することで、読者は著者のプロジェクトの全体像を日本語で見渡せるとともに、ジェンダー批評が取り入れられてからのコンラッド研究全体の足跡をたどることができる。

まず各章を簡潔に紹介したい。第1章『『オールメイヤーの阿呆宮』—オールメイヤー夫人像に見る人種とジェンダー—』は、コンラッドが現地人女性をステレオタイプにおさまらない複雑な内面をもつものとして造型し、自らの言葉で語らせていることを評価する。また、その「野蛮」<sup>1</sup>で「魔女」じみた言動が、未開の部族の血や文化にではなく、何よりも2人の白人男性（養父と夫）の抑圧に起因する抵抗と読めることを指摘し、19世紀末イギリスの女性問題との関連を示す。

第2章『『島の除け者』—アイサ像に見る人種とジェンダー—』は、植民地での白人男性と現地人女性の恋愛に、白人男性中心主義が影を落としていることを明らかにする。そして、当時の尺度では人種（非白人）的にも性別（女性）的にも従順であるはずのアイサが、強い生命力と自我を感じさせ、異教の習慣で自己主

---

<sup>1</sup> 本稿における章タイトル以外の引用は、とくに断りのない限り、すべて著者によるコンラッドからの引用である（出典は省略する）。

張ることが、ウィレムズが彼女への嫌悪と恐怖をつのらせる真の理由であると分析する。

第3章『『闇の奥』(1)一男の夢の挫折』は、有能な白人男性の現地文化への適応が、植民者としては敗北を意味し、疑似科学により退化とみなされていたこと、そのためクルツが西洋的な男らしさの破綻の象徴となったことを読み解く。よって、その最後の叫びは白人男性の発するべきでない、男らしくない言葉であったと解釈できるという。著者による「怖い！怖いよ！」という訳文にも注目したい。

第4章『『闇の奥』(2)一「男同士の絆」の危うさ』は、作品中の男同士の絆が意外にもろいことを発見する。まず、マーロウとクルツの絆は、自己と戦った者だけが到達しうる一種の悟りとして、植民地での秘密を共有する。しかし、その絆を維持する(秘密を守る)には心的負担が大きい。さらには、クルツとの絆のために、マーロウと海の仲間たちの長年の絆まで危うくなる。一方、マーロウと「未開人」操舵手の絆は、人種の偏見により、「一種の協力関係」に過ぎないことを示す。

第5章『『闇の奥』(3)一「女性排除」の問題をめぐって』は、マーロウによるクルツの婚約者の真実からの排除や、女性たちが「美しすぎる世界」に住んでいるという差別的な発言の真意は、植民地支配の欺瞞から女性(家庭の天使)を守ることにあつたとする。しかし、その意図に反して、物語に登場する女性たちはすでに植民地(男の世界)に関わっており、しかもその役割は小さくないことを示す。

第6章『『ロード・ジム』一英雄的夢を求めて』は、主人公が19世紀末の少年文化(帝国を称揚する冒険小説)やパブリック・スクール教育(帝国拡大のための人材育成を旨とする)の産物であり、当時の「象徴的」な帝国臣民と言えることを指摘する。そしてそのことが、一見ゆるぎない帝国主義者であるブライアリー船長やフランス軍中尉の、ジムの失態への過敏な反応を引き起こしたと読む。

第7章『『密偵』一「家庭の天使」から「ニュー・ウーマン」へ』は、この作品でコンラッドが初めて女性を主人公とし、当時の中産階級女性の苦境(結婚しなければ人生の敗北者とみなされ、結婚すれば自らの財産権を失い、外に出て働く機会もほとんどない)を十分に描いているとする。ただし、「自由な女」になったウィニーの自由は長くは続かず、「絶望の女」に戻ることに注意を促す。

第8章『『西欧人の眼に』一ナタリア像に見る女性の偶像化』は、一見すると家庭の天使のステレオタイプのような西洋人女性も、テキスト全体として見れば、多面的で精神的に自立した存在として提示されていることを示す。それには、ラズモ

フのパロディ化されたダブル(分身)としての偽りのフェミニストの登場と、語り手「私」によるナタリアの男性的な面の補完の2つが効果をあげているとする。

第9章「コンラッドの小説に見る女性の偶像化—その背景をめぐって」は、この作家の偶像崇拝的な女性描写の起源を、そのポーランドの出自に求める。すなわち、貴族階級シュラフタ出身である父アポロのロマンティックで騎士道的な価値観、聖母マリア信仰に育まれた伯父タデウシュの姉妹崇拝、そしてコンラッド自身が母の書いた手紙から受けた印象などである。女性に対するコンラッドの異国風のマナーも紹介されている。

第10章「コンラッドの女性戦略—『西欧人の眼に』から『チャンス』へ」は、英米の女性読者への意図的なアピールが『西欧人の眼に』においてすでに始まっていたとする<sup>2</sup>。この作品では、書かねばならないロシアの主題を追求するため、女性には前景化していないものの、女性を意識したフェミニズムの要素が導入されている。第8章で見たフェミニストをはじめ、戦闘的なサフラジェットを彷彿させる2人の女性革命家、そして「私」の助言を必要としない、強い女性としてのナタリアが登場する。

第11章「『チャンス』(1)—ファイン夫人に見るフェミニストの肖像」は、ファイン夫人と、彼女のフェミニズムについてのマーロウの言説を区別する必要性を説く。そうすることで、フェミニストを見下していると思われがちなマーロウの、「女であること」という「恐ろしく難しい職業」への共感も読み取れるという。さらに、ファイン夫

---

<sup>2</sup> コンラッドと女性読者については、グレアム・スウィフトの『マザリング・サンデー』(2016、邦訳は新潮社2018年)に触れておきたい。この小説では1924年にコンラッドを読み始めたメイド、つまりコンラッドの女性読者が主人公である。もちろんフィクションではあるが、のちにコンラッドに似た作風の現代作家となった彼女(ジェーン)が、コンラッドは「男性の読む作家ではありませんか」(真野泰訳155)と問われる場面でも、本書とリンクする。さて、その同意しかねる質問に、彼女は20世紀初頭という「何もかも重心は男寄りだった」(同156)時代に、「ひょっとすると危険かもしれない未知の領域に入っていくあの感覚」(同158)や、そして何よりも、コンラッドが「新しい言語を見つける」という「本物の冒険」(同159)を成し遂げたことを回想する。このような当時の女性読者だからこそ感じたかもしれない冒険的なものの魅力は、現代の読者にも十分に想像しうる、作者の意図せざる女性戦略と言えるだろう。ちなみに、この小説の映画版『帰らない日曜日』(2022)は、コンラッドをヴァージニア・ウルフに置き換え、よりわかりやすく女性の自己実現(フェミニズム)を称揚するものとなっている。

人と『パンチ』の風刺画(ニュー・ウーマンや女ドンキ・ホーテ)との類似を、視覚的なキーワードをあげて解説する。

第12章『『チャンス』(2)一マーロウのミソジニスティックな言説についての問題』は、マーロウの女性への共感的で多角的な見方と、弁証法的な枠の語りを取り上げる。その枠構造の対話(実は男性にも懐疑的なマーロウと、教養には自信があって「女性に優しい男らしい奴」である「私」による)は、女性参政権をめぐる混乱の真っ只中にある読者の反応を引き出す装置であったと見る。

第13章『『勝利』—「男らしさ」の理想と現実』は、晩年のコンラッドが1890年代の辺境植民地を舞台に、ジェンダー逆転的な世界を描いていると述べる。名物脇役ショーンバーグが男らしい自己を装うために「胸を張る」しぐさや、ショーンバーグ夫人とリーナの大胆で計画的な行動、そして男らしく見えるが懐疑主義のために男らしく行動できないヘイストと、女性的なゲイのジョーンズらによってジェンダー・カテゴリーが無効化されていることを論じる。

以上が評者の理解による本書の大まかな内容である。全体として、コンラッドの初期・中期・後期(晩年)の作品を偏りなく取り上げ、ジェンダー表象の分析を基本としつつも、その分析をそれぞれの作品の重要ポイントの解釈に結びつけている。また、コンラッドの想定した読者が、徐々に男性から女性に拡大したことが意図的なものであったという指摘も印象に残った。

ここからはとくに興味深かった点をふりかえる。まずは、オールメイヤー夫人と19世紀末の女性問題との意外なつながりである。このマレー人女性は、修道院で教育を受けたことから、白人の夫に「奴隷」にされたという不満を持ち、オールメイヤーはそれを「結局は奴隷にすぎないマレーの女」の「理屈に合わない憎しみ」としか見ない。このように、一見するとオールメイヤー夫人の不幸は、白人優位の異人種婚のもつれに過ぎないようであるが、著者はそこに夫婦の義父による家長支配の影響があることを見逃さない。つまり、オールメイヤー夫人は、人種による抑圧というよりはむしろ、家長長制による抑圧を受けていたと著者は読む。すなわち、彼女のいう「奴隷」とは、非白人の置かれていた状態のことというよりは、当時の女性一般にあてはまる言葉であったと解することができる。これはその後、オールメイヤー夫人と混血の娘ニーナが白人の伝統を捨てるという展開にも、別の意味を与えるように思われる。

また、本書はフェミニズムについても3つの章をあて、コンラッドが時事問題に

敏感に反応していたことに注意を促している。上述のように、コンラッドは『西歐人の眼に』（ピーター・イヴァノビッチ）と『チャンス』（ファイン夫人）の2作において、物語中にフェミニストを登場させ、当時の女性問題に触れている。そして、語り手である語学教師の「私」と、おなじみの語り手マーロウを介在させることによって、フェミニズムに対する読者の多様な反応を許容するような語りを実現しているとする。また、コンラッドは『家庭の天使』を書いた詩人パットモア（1823-96）が実は家庭の暴君であったことをファイン夫人の父親像に投影しているという。コンラッドが女性の反逆に賛同していたかは別として、その原因が家長父長制にあることに気づいていたことは確かなようである。著者によるテキストの引用は厳選されており、本書を読むだけでも当時のフェミニズムに対する様々な評価を知ることができる。

一方、本書は女性をめぐるジェンダー問題だけでなく、当時の男性におけるジェンダー問題についても紙幅を割いて検討している。すなわち、コンラッドの作品における男性たちが、当時の白人男性に期待された、男性としての優位性を示さなくてはならないという不安に複雑に絡め取られていたことを示している。そして、これまで語られることの少なかった何人かの脇役についても、白人としての自負とプレッシャーにさいなまれたキャラクターとして語り直している。見ず知らずのジムの不名誉を苦に自殺するブライアリー船長や、同じくパニック症状的な「不安」に襲われるフランス軍中尉は、実はジムと同じ問題を抱えていたのであり、コンラッドが間接的に、男らしさの規範が持続できなくなりつつある時代を描いていたという解釈には説得力がある。また、『勝利』において、ショーンバーグが退役軍人のように胸を張ることや、ヘイストの外見が「軍人風」と描写されていることにも、軍人であることが男らしさの表れとされた当時の風潮が反映されていると解釈している。

最後に、本書は『闇の奥』について、「クルツの最後の叫びは、男らしさを失った姿」（本書 50）を示すものという見方を提示している。著者が **The horror! The horror!** にあてた「怖い！怖いよ！」という個性的な訳は、その男らしくない姿を、クルツの発話そのもので表現しようとしたものである<sup>3</sup>。第3章にあるように、後期ヴ

<sup>3</sup> 2001年の『闇の奥』の著者訳（近代文芸社）では「恐い！恐いよ！」という漢字を用いている。参考まで、2009年の黒原敏行訳（光文社）は「怖ろしい！怖ろしい！」、そして2006年の藤永茂訳（三交社）と2022年の高見浩訳（新潮社）は、中野好夫訳（岩波書店、1958年）の「地獄だ！地獄だ！」を踏襲している。

ィクトリア朝の読者にとって、男らしさを失うことは進化の下位レベルに退行することを意味した。したがって、「女性や子供や劣った人種」(同 47)が口走るような「男が発するべきではない言葉」(同 50)によって訳している。この部分は従来の邦訳にはない野心的な解釈であり、本書の核心をなす部分であると同時に、『闇の奥』研究に新たな1ページを開くものになるだろう。

本書は男らしさ・女らしさが歴史的に構築された概念であり、ヴィクトリア朝を象徴するその概念がすでに19世紀末に危機に瀕していたことをコンラッド作品の中に読み取ろうとする。そして、コンラッドがそのことを一貫して自身の作品の登場人物における一種神経症的な言動に託して描いていたと指摘する。本書はコンラッドが自らの同時代に向けていた視線をジェンダー表象の観点から再構築してみせた労作である。

(いのうえ まり 東京理科大学ほか 兼任講師)